竹取物語

かぐや姫の嘆き　―　現代語訳　―

八月十五日頃の月に向かって出て座って、かぐや姫は、たいそうひどくお泣きになる。人目も今はお気になさらずに泣いていらっしゃる。これを見て、親たちも、「どうしたのだ。」と興奮して問いただす。かぐや姫が、泣きながら言うには、「以前にも申し上げようと思ったけれども、きっと心をお乱しになるにちがいないと思って、今までそのままにしていたのです。（しかし、）ずっとそれでいられましょうか（いや、いられません）と思って、うち明けてしまうのです。私の身は、この国の人ではありません。月の都の人なのです。それが、前世からの因縁があったことによって、この世界には参上していました。今は帰らなければならないときになってしまったので、今月の十五日に、あの以前の国から、（私を）迎えに人々が参上しようとしています。避けようもなく、どうしてもおいとましなければならないので、（そのときに、翁と嫗とが）お嘆きになるかもしれないのが悲しいこと（だと思って、そのこと）を、今年の春から、嘆いているのです。」と言って、ひどく泣くので、翁は、「これは、何ということをおっしゃるのか。竹の中から見つけて差し上げたけれども、からし菜の種の大きさでおありだったのを、私の背丈と同じくらいになるまでに育てて差し上げたわが子を、何者がお迎えしようか（いや、何者もお迎えすまい）。どうして許そうか（いや、許すまい）。」と言って、「私こそ死のう。」と言って、泣き騒ぐ様子は、まったくいかにもこらえきれないようである。

かぐや姫が言うことには、「（私には）月の都の人で、父母がいます。僅かの期間といって、あちらの国から参上しましたが、このように、この国では多くの年を過ごしてしまったのでした。あちらの国の父母のことも思い出さず、こちらには、こうして長い間楽しく過ごさせていただいて、慣れ親しみ申し上げました。（帰るとなっても）うれしく思われる気持ちもしなくて、悲しいだけです。そうではありますが、自分の本心とは違って、おいとましてしまおうとしています。」と言って、（翁たちと）一緒にひどく泣く。

（翁に）召し使われている人々も、長年（かぐや姫に）慣れ親しんでいるので、別れ別れになってしまうことになるのを（思って）、性格などが上品でかわいらしかったことをいつも見てなじんでいるので、（別れて後に）恋しく思われるだろうことがこらえきれなくて、湯や水も飲めずに、（姫や翁たちと）同じ思いで悲しんだ。